一宮西高新聞

発行所

愛知県立一宮西高新聞部

愛知県一宮市萩原町串作河田１

電話一宮(68)1191

スペシャルオリンピックス開幕

九月二十二日からの四日間、愛知県内で初めて「スペシャルオリンピックス」が開催される。これに先駆け、八月十四日、ミッドランドスクエアにて取材会やカウントダウンボードの完成披露会などが行われた。

皆さんは「スペシャルオリンピックス」をご存じだろうか。「スペシャルオリンピックス」は、知的障害のある人達に様々なスポーツトレーニングとその成果の発表の場である競技会を、年間を通じ提供している国際的な非営利活動のスポーツ組織だ。

偏見は無知から

私たちは取材会で、スペシャルオリンピックス日本理事長である有森裕子さんから多くのことを学んだ。

記者が大会で注目すべき場所について尋ねると、有森さんは「知的障害があるとできないことが多いと思われがちだが、できないことは案外少ない。機会があることでできるようになる。この大会では『知的障害があってもできることはたくさんある』ということを見て、そんな気付きを大切にしてほしい。そして、知的障害のある人に興味を持ってほしい」と明るく語った。記者がノーマライゼーションとの向き合い方について尋ねると、有森さんは「障害者への差別などは無知だから起こる問題。違い＝良い悪いではなく、障害があってもなくても変わらないということを知ってほしい。この大会を知的障害について知ってもらう場とし、ノーマライゼーションへつなげたい」と真剣に語った。有森さんは、障害については「ないものを考えて落ち込むのではなく、あるものを考えるよろこびや可能性、あるものに対する期待をもつべきだ」との考えを語った。これは障害以外のことにおいてもいえるのではないだろうか。また、「障害は『持つ持たない』ではなく『あるない』だ。『持つ持たない』は自分の意志で決めることができるが、『あるない』は自分の意志では決めることができない」とかみしめるように語った。

知ってもらうこと

また、スペシャルオリンピックス日本理事長である鈴木盈宏さんは挨拶の際に、スペシャルオリンピックスの魅力について「スペシャルオリンピックスをより多くの人に知ってほしい。アスリートの笑顔がスペシャルオリンピックスのいちばんの魅力。出場したアスリート全員にメダルまたはリボンが贈られるので、アスリートはみんな笑顔になる。なので、アスリートの笑顔に注目してみてほしい」と語った。

高校生の活躍

ここで忘れてはならないのが、私たちと同じ高校生の活躍だ。今回カウントダウンボードを制作したのは名古屋市立工芸高等学校のみなさんだ。代表の中郷咲希さんは、カウントダウンボードの完成披露にあたり「高校最後の一年、この学校でしかできないことをやりたかった。アスリートたちが自分らしくいられるようにという気持ちを込めて作った」と緊張した面持ちで話した。

名古屋市立工芸高等学校のみなさんは披露会の後の取材で、「今回のカウントダウンボードだけでなく、普段から駅のポスターや児童館のHPなども制作している」と緊張もほぐれたのかにこやかに話していた。

編集後記

私は、今回取材させていただくまでスペシャルオリンピックスについて全く知らなかった。なので、今回はとてもいい経験になった。有森さんの「偏見は無知からくる」という言葉は本当にその通りだと思うので、私の新聞を媒体として多くの人にスペシャルオリンピックスについて知ってもらえるといいと思った。

また、取材に関しても初めてのことだったので、自分から率先して質問するというのは案外難しいと感じた（される側はもう機会はないだろう）。

私の文章はまだまだ拙いが、この新聞が名古屋市立工芸高等学校のみなさんの制作のように誰かのためになる新聞になることを願う。